

【研究内容 学級活動（上学年）】

一人ひとりの学校適応感を高める学級集団づくりの年間戦略 — 自己開示と感情の交流を念頭に置いた学級活動等の実践を通して —

宮城県富谷市立東向陽台小学校
教諭 遠藤 仁樹

1 主題設定の理由

(1) 目の前の児童の実態から

本学級は、6年生男子12名、女子16名の計28名の学級である。男女ともに決まった小集団で行動している姿から、仲間意識の低さを感じ、同時につながりを求めることへの恐怖心をもっていることがうかがえた。何かに立候補することはおろか、授業中に発表することさえしない児童が約8割だった。その理由を問うと、「他の人が発表するから。」「恥ずかしい経験をしてきた。」「学校も授業もつまらない。」といった学習性無力感が大きな要因であることが分かった。それが、能動的に活動する姿勢を止め、誰かの一言を待つ態度を生んでいた。

以上のことから、受容的共感的態度を前提とした自発的自治的風土の醸成を目指し、計画的な学級づくりを行っていく必要性を感じた。

(2) 主題と副題について

①学校適応感

アセス (ASSESS: 2019) は、学校での適応感と学校以外での適応感の両方を反映した全体的な適応感を示す「生活満足感」を含む6因子で測定することができる。その6因子とは「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非傷害的関係」「学習的適応」である。上記の児童の実態を踏まえ、自己開示と感情の交流を通して、「学校満足感」の高まりを目指す。

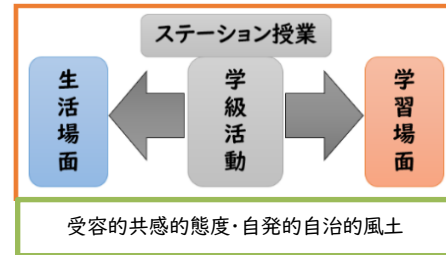
②学級集団づくりの年間戦略

前学習指導要領では、「望ましい学級づくり」の条件として、居場所(役割)、規範意識、感情交流、自己開示の育成の4点を挙げていた。令和の日本型学校教育における現行の学習指導要領においても、踏襲されている。また、現行学習指導要領解説特別活動編では、「学級活動における自発的、自治的な活動を中心として学級経営の充実を図ること」としている。さらに、河村茂雄(2012)は学級集団づくりの現実的な流れとして、「混沌・緊張期」「小集団成立期」「中集団成立期」「自治的集団成立期」を提案している。本論文では集団づくりの中の個の高まりを目指す。

③学級活動等

赤坂真二(2014)は、学級集団育成プランとして、教科指導や道徳、特別活動において「ステーション授業」と呼ばれる「教師が子どもに身に付けさせたい価値やスキル・態度を伝える授業群」を提唱している。生活場面や学習場面でその学びを日常化することで学級をチーム化していくという。今回はそのステーション授業の中心に「学級活動」を据える。学級活動に関連する教育諸活動を含めて実施することで、受容的共感的態度や

自発的自治的風土を醸成し、学びを様々な場面に日常化していくことを目指した。



【図1】本研究における自己開示と感情の交流を念頭に置いたステーション授業構想

2 実践の概要

(1) 自己開示と感情の交流を念頭に置いた学級活動等の捉え方

先行研究や先行実践をもとに、本研究では「自己開示と感情の交流を念頭に置いた学級活動等」を以下のように捉えた。

アサーティブコミュニケーション（自分と相手の両者の双方を尊重した自己表現）の視点を取り入れることで、人間関係形成や社会参画、自己実現を促すことを目指した学級活動の授業デザインとそこに付随する教育諸活動

(2) 研究の手だて

以下の手だてを講じれば、学校満足感の高まりを目指して計画的に指導改善を図ることができるであろう。

- (3. 1) 集団と個の丁寧な実態把握
- (3. 2) 自己開示と感情の交流を促すノート活用の工夫
- (3. 3) 学級集団づくりと学級活動等を組み合わせた年間を見通した戦略の作成
- (3. 4) 児童の変容の記録と手だての有効性の検証

(3) 研究の実際

3. 1 集団と個の丁寧な実態把握

集団と個の実態把握を、次の3点で行った。

①アセス（学級集団と個）

休校明けから1か月が経過した7月と3月の2回調査を行い、学級としての結果、個人の結果を分析、活用、評価することとした。7月は、以下の通りとなり(表1)、「生活満足感」を筆頭に、「友人サポート」と「学習的適応」が80%を下回る結果となった。

調査項目	満足群 (80%以上の割合)	A児 (%)
生活満足感	65	31
教員サポート	100	83
友人サポート	78	33
向社会的スキル	84	31
非傷害的関係	90	39
学習的適応	78	35

【表1】本学級とA児のアセスの結果（7月）

個の結果では、A児が全般的に低く、上記の通りとなった。ADHDの診断、ASDの傾向があり、通級指導教室に通級している。そこで特別支援コーディネーターと連携し、「合理的配慮」を考えながら抽出児童として経過を追うこととした。特に課題と思われる「向社会的スキル」を中心に支援検討シートを作成した(資料1)。

支援検討シート			
名前	項目の選択 学習・行動・社会性・その他	ポイント	本人に関する情報 気かりな点 強みとして生かせる点 伸ばしたい方
A	社会性	人との関わり-6/10 コミュニケーション-4/10 異年齢との関わり-4/10 自己理解-4/6 感情の認識-3/7/10	<p>口ずかしさや環境への不安から、自分の思いを聞かせる声で伝える見られない。</p> <p>口を開く参加としては、強弱する立場としての参加が多く、自分からのアプローチが少ない。</p> <p>口を開く時、自分から周囲の児童に声を掛ける姿は見られない。</p> <p>衝動的な言動や行動は見られず、落ち着いた学校生活を送っている。</p> <p>関係を築いていけると一対一対応で反応が返ってくる。</p> <p>前年度から同じクラスとなった児童2名から積極的な声かけを受けてもらっている。</p> <p>困ったときに自分から周りにいる人に声を掛ける力。</p> <p>何かを聞かれた際に反応を返す力。</p>

【資料1 A児の支援検討シート】

②学級集団づくりチェック表(学級集団)

先行研究がなされている、「学級集団づくりにおけるチェック表(資料2)」を活用した。

チェック表は6視点・30項目あり、4段階評価で、点数化しやすい。1観点につき、合計の最高点が20点であることから、6割の12点に届かない視点については重点指導事項として、指導の強化を図っていく。

観点	項目	評価
学級集団づくりの目的	1. 学級集団づくりの目的を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	2. 学級集団づくりの目的を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	3. 学級集団づくりの目的を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	4. 学級集団づくりの目的を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	5. 学級集団づくりの目的を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
学級集団づくりの計画	1. 学級集団づくりの計画を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	2. 学級集団づくりの計画を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	3. 学級集団づくりの計画を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	4. 学級集団づくりの計画を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	5. 学級集団づくりの計画を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
学級集団づくりの実行	1. 学級集団づくりの実行を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	2. 学級集団づくりの実行を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	3. 学級集団づくりの実行を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	4. 学級集団づくりの実行を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	5. 学級集団づくりの実行を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
学級集団づくりの評価	1. 学級集団づくりの評価を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	2. 学級集団づくりの評価を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	3. 学級集団づくりの評価を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	4. 学級集団づくりの評価を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1
	5. 学級集団づくりの評価を共有し、目標を設定する。	4・3・2・1

【資料2 学級集団づくりチェック表】

通常学級の中で特別な配慮を必要とする児童、通級指導教室該当児童等、特に合理的配慮について常に情報共有をした。

3.2 自己開示と感情の交流を促すノート活用の工夫

自己開示と感情の交流を促しやすくするために3つのノートを活用した。

①おしゃべりノート

毎日、担任と児童一人一人が交換日記を行うことで自己開示を促す。ただし、書いた内容については、クラスメートに開示しないこととした。

②作文帳

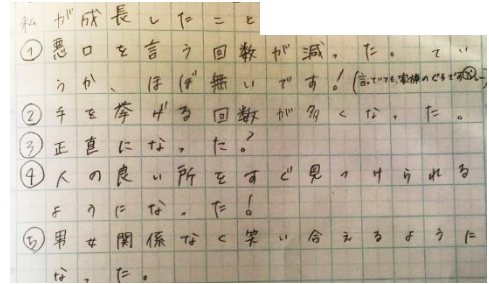
週末や行事周辺に活用。個人が思っていることを全体で共有するツールとして使用した。

③自主学習ノート

教科の学習や興味のあることをまとめる自主学習ノートだが、日常の中での思いや考えを備忘録として記録することを許可した。例えば、友達や支援学級の児童との関わりのこと、授業へ取り組

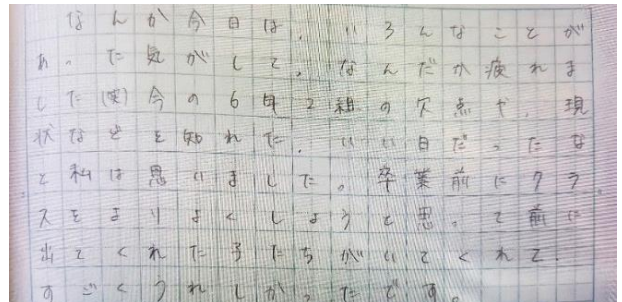
む全員の姿勢、自分や学級の課題や成長等である。児童は全体で共有されることを前提として書いている。

①については自己開示と担任との縦のつながりを、②と③は自己開示と感情の交流(児童同士の横のつながり)を促すために使用した。



【資料3 自分の成長についてまとめた自主学習ノート】

朝や帰りの会に、タブレットで撮影した児童のノートをテレビに投影し、どう感じたかをペアで話し合わせ、すぐに全体にフィードバックさせるという流れで共有した。児童は3つのノートを使い分け、特に③を多く活用しながら、一人の思いを全員事として捉えていくことができ、アサーティブコミュニケーション力の育成へとつながっていった。



【資料4 学級の現状について自主学習ノートにまとめた例】

3.3 学級集団づくりと学級活動等を組み合わせた年間を見通した戦略の作成

実態把握を受けて、学級集団づくりと学級活動等を組み合わせた年間戦略を作成した。

	時期	学級集団づくりの視点	学級活動等の視点
混沌・緊張期(指示的)	6月1週目	<ul style="list-style-type: none"> ○ルールの設定 ・児童の思いや経験、担任の思いを合わせる。 ・教師も守る。 ・具体のイメージをもてる。 ○当番活動の明確な構造化 ・自走できるシステムづくり。 	<ul style="list-style-type: none"> ○当番活動や係活動、朝の会や帰りの会のシステム化 ○話し合い活動コーナーの設置と司会団の仕事内容の確認 ○ショート話し合い活動の体験 ○アセスの実施・分析・活用
		<ul style="list-style-type: none"> ○人間関係づくり開始 ・教師から遊びや話の聴きの方の提案、賞賛等。 	<ul style="list-style-type: none"> ○聴き方モデルの提示とロールプレイの実施① ○構成的グループエンカウンターの実施(年間)②

小集団成立期 (説得的)	7月	<ul style="list-style-type: none"> ○ルールの定着 ・児童と教師相互のふり返り。 ・例外を作らない。 ・ルールを守ることの快感。 ○ペアやグループ学習の奨励 ・周囲からの承認や評価。 ・責任の所在の確認。 ・ローテーション制度の導入(リーダーとフォロワー)。 ○主体的な行動をする児童1/3 	<ul style="list-style-type: none"> ○学級システムのふり返り・改善 ○<u>学級目標の設定</u>^③ ○学級通信で話合いの様子や児童の自己開示の言葉を掲載 ○授業内でペアやグループ学習を意図的に活用 ○話合い活動の司会団の輪番制 ○リーダーとフォロワーの説明 ○アセスのふり返りと活用
中集団成立期 (参加的)	9, 10月	<ul style="list-style-type: none"> ○生活班等の構成メンバーを大きく変えて人間関係形成の広がり ○どの活動も目標と役割分担を確認し、ルールの内在化と習慣化 ・集団の雰囲気維持する働きをする児童や能動的な行動を賞賛。 ・個人の行動が集団に与える影響を確認。 ○教師は一步下がって見守り ○主体的な行動をする児童2/3 	<ul style="list-style-type: none"> ○絵本「わたしのいもうと」の読み聞かせでいじめ防止 ○児童による実習生お迎えの会とお別れの会、転校生お別れ会、ソーラン節の引継、お楽しみ会等の企画・運営 ○学級目標のふり返り ○学級通信で話合いの様子や児童の自己開示の言葉を掲載 ○アセスのふり返りと活用
自治的集団成立期 (委任的)	それ以降	<ul style="list-style-type: none"> ○集団の目標を児童自身の行動で達成 ・教師は児童の援助に回る。 ○中集団を全体に統合 ・中集団同士のぶつかり合いが起りやすくなっている。 ・リーダーシップを柔軟に切り替える。 ○親和的・主体的に活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童による学級システムの改善 ○<u>学級の枠を超え、児童による学年や学校の改善</u>^④ ○学級目標のふり返り ○学級通信で話合いの様子や児童の自己開示の言葉を掲載 ○学級通信を児童が作成 ○<u>他教科への派生</u>^⑤ ○アセスの実施・評価

ここでは、6月に行った聴き合う関係づくりの指導と構成的グループエンカウンターについて述べ

る。また、実際に児童から提案され、7月に行った「学級目標」に関する内容(1)の話合い、11月に行った「学級でやっていることをどうすれば全校に広められるか」という内容(3)に関わる話合い、ステーション授業から発展した国語科の実践を例に述べる(表中波線部)。

①6月：聴き合う関係づくりの指導

混沌・緊張期。ソーシャルスキルトレーニングを以下の流れで行った。

- ・絵本「教室は間違るところだ」の読み聞かせ
- ・よい聴き方と悪い聴き方モデルの演示
- ・児童によるロールプレイとふり返り
- ・オープンクエスチョンの例示、一覧の配布

オープンクエスチョンについては例を一覧にしてラミネートを掛け、児童一人ひとりに渡した。聴き方を理解させるだけでなく、オープンクエスチョンを学ばせることで「対話」を促した。発達が気になる児童もそうでない児童も、知識と体験を通して「対話」の素地ができていった。

②6月：構成的グループエンカウンター

実践した内の1つである「カードトークで自己紹介」を紹介する。

- ・インストラクション
- ・エクササイズ

(カードに書かれたテーマに沿って一人1分話す)

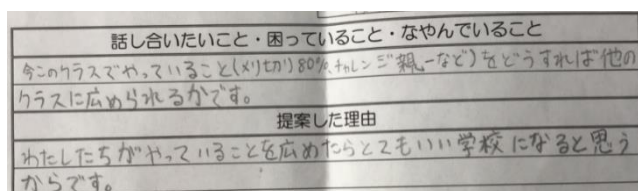
- ・シェアリング(ふり返り)

カードに「好きな食べもの」等のテーマが示されていることで無理に話題を探する必要がなく、輪番でカードを引いて話していくので、公平性も保たれる。自己開示と他者理解が進んだ活動であった。教育実習生を迎える際には児童自ら応用し、自己紹介として一人一枚の名刺を作って渡す活動につながった。

③7月：【話合い】学級目標・学級の愛称・キャラクター

小集団成立期。学級目標は知・徳・体に分けて「メリ切り80%」「親一」「チャレンジ」と決まり、愛称は「カッパ先生のおにぎり食堂」となった。話合い活動は「おにぎり会議」と称し、赤坂が提唱するアドラー心理学に基づいた「クラス会議」に手を加えて導入した。話合いについては、マニュアルを整備して司会団が安心して取り組めるようにするとともに、話合いの初めに褒め言葉を贈り合う時間を設けることで受容的共感的風土の醸成を促した。実態として、「他の人が発表するからいいです。」「恥ずかしい経験をしてきたから。」「授業はつまらない。」という話が児童からあったが、徐々に児童自身がその点を見つめるようになり、「見て、反応し、フォローしよう」という合言葉まで話合いで生まれた。どれにおいても、折り合いをつけ、全員一致での合意形成となったことで、「学級集団」への意識が醸成されていった。愛称は学級便りの題名にし、学級目標やキャラクター、合言葉は学級便りに常に掲載した。

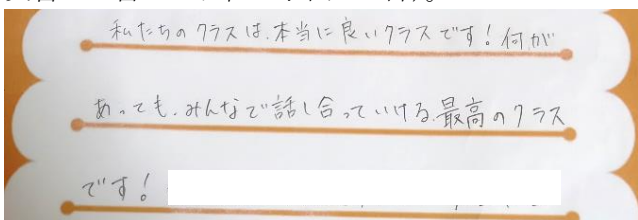
④ 1 1月：【話し合い】学級でやっていることをどうすれば全校に広められるか



【資料5 学校全体を巻き込む議題書】

自治的集団成立期。学級内での共同体としての成功体験は、学校全体にも共有したいという思いへと広がり、自分たちが教室で実践していることを全校にも広げようという議題まで提案された。司会団に立候補した児童からは「明日はいよいよ話し合い。黒板書記、とても緊張します。これまでで一番難しい議題ですよ。話し合っている内容をうまくまとめられるか不安です。でも司会さんはもっと緊張すると思うので、頑張ってくださいサポートします。」という自主学习ノートでの自己開示があった。結果、「見て、反応し、フォローしよう」を実践に移すことになった。実際にどの場で実践するかは個人の意志決定に委ねられた。委員会活動で合言葉を実践した児童のふり返りとして、「(人の意見に対して)『いいと思います。』と反応することや返事をしっかりできました。クラスの話合いで決まったことをできたと思います。ですが、他のクラスの人は真似して言ってくれませんでした。ただそんなこと言っても意味がないので、もっと元気に、印象に残るように言います。」という自主学习ノートでの自己開示があった。これらは全体にフィードバックした。学級が児童によって自走し、自治になっていることが分かった。

児童からは以下のように学級や話し合い活動、学級目標を肯定的に捉える記述が見られた(児童が教育実習生へ書いたお礼の手紙の一部)。



【資料6 学級や話し合い活動に対する児童の思い】

⑤ 1月：【国語】プロフェッショナルたち

学級活動の話し合い活動で培われた力と国語科で培ってきた力を融合させ、教材に登場する3人のプロフェッショナルの生き方についてまとめる授業をさせてほしいと児童たちから依頼が来た。一緒に授業構成を考えて実施すると、授業者の児童だけでなく、授業を受ける児童も生き生きとノートにまとめ、交流し、発表する姿が見られた。ステーション授業としての学級活動が、学級の文化として根付いていることが分かった。

(4) 児童の変容の記録と手だての有効性の検証

手だての有効性を検証するため、ノートの活用、学級経営と学級活動の年間計画の作成と指導の充実を図ることが、集団と個にどのような影響を与えていくのかを、観察と児童の様々な記録によって蓄積し、指導に生かすこととした。

3 成果と課題

(1) 成果

アセスを3月にとると、以下のような結果となった(表2)。学級としては全体的に約90~100%の間にまで上がり、上昇率としては10~24%となった。特に生活満足感や向社会的スキルに大きな変容が見られた。

調査項目	満足群(80%以上の割合)	7月との差
生活満足感	89	+24
教員サポート	100	0
友人サポート	89	+11
向社会的スキル	97	+13
非侵害的關係	100	+10
学習的適応	89	+11

【表2 本学級のアセスの結果(3月)】

A児の結果は以下の通りである(表3)。アサーティブコミュニケーションの視点での指導改善を行ったことで、非侵害的關係や生活満足感に大きな変容が見られた。集団、個のどちらにおいても、学校適応感に向上が見られた。

調査項目	満足度(%)	7月との差
生活満足感	50	+19
教員サポート	83	0
友人サポート	46	+13
向社会的スキル	38	+7
非侵害的關係	83	+44
学習的適応	41	+6

【表3 A児のアセスの結果(3月)】

(2) 課題

アセスの全項目において数値の上昇が見られたが、集団、個ともに、不満足群にある項目がある。また、A児の課題とする「向社会的スキル」の上昇は+7%で満足度38%に留まり、大きな改善とはならなかった。何が足らなかったのか、何に重きを置きすぎたのか、今後さらに分析し、今後の研究に生かしたい。

また、特に要学習支援領域にプロットされる児童がチャート上に見られた。ステーション授業としての学級活動と他教科との具体的な関連のさせ方や、より多くの児童の具体的変容の見取り方を、今後の研究の課題としたい。

《参考文献》

- ・「学級集団づくりゼロ段階」(河村茂雄 図書文化 2020)
- ・「アセスの使い方・活かし方」(栗原慎二・井上弥 ほんの森出版 2019)
- ・「学級づくり・授業づくり 成功の極意」(赤坂真二 明治図書 2014)
- ・「赤坂版『クラス会議』完全マニュアル」(赤坂真二 ほんの森出版 2014)
- ・「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)」(文部科学省 文溪堂 2019)
- ・「子供の心を伸ばす 特別活動のすべて」(清水弘美 小学館 2020)
- ・「エンカウンターで学級づくり12か月 フレッシュ番 小学校高学年」(山本寛治・星由希 明治図書 2012)
- ・「よくわかる学級ファシリテーション②」(岩瀬直樹・ちよんせいこ 解放出版社 2012)
- ・「フォレストネット」(指導案・実践例共有サイト foresta.education)